

「大町桂月と、龍頭が滝」

（その4「東京よりわざわざ見に行く価値なき、とはいうけれど。」）

大町桂月は、龍頭が滝のどこに面白さを感じたのか。また、龍頭が滝は、数多い日光の滝の中でも 10 番以内には入るだろう、と称賛しておきながら、すぐその後で、「されど、東京よりわざわざ見に行く価値なきことは言うまでもなし」、と評価を下げたのは、なぜなのか。この二つのことを、今回、取り上げてみたいと思います。

龍頭が滝には、華厳の滝のように、落差が 100m というような豪快さはありませんが、小規模ながら、凜とした姿の滝です。しかし、龍頭が滝の持つ一番の魅力は、「裏見」にあるのではないかと思います。桂月は、日光の滝ベスト 10 に、「裏見の滝」を入れていました。滝を裏側から見ることができるというのは、ほかの滝では体験できない、龍頭が滝の持つ大きな特徴であり、桂月も、この点を面白いと感じ、惹かれたのではないのでしょうか。（個人の見解ですが。）

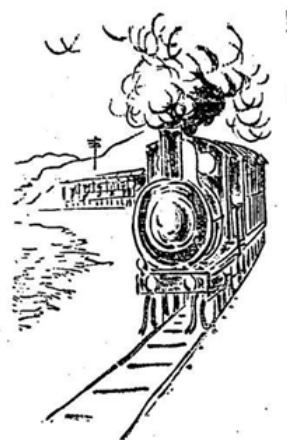
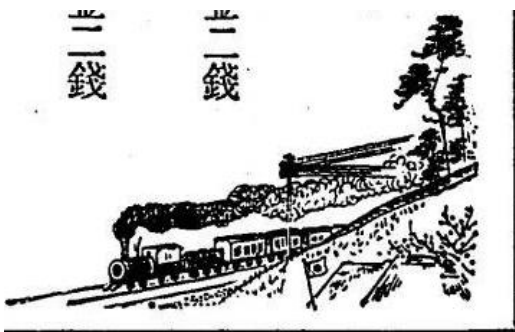
さて、桂月は、明治 32 年に、出雲に臨月の妻と子供を残し帰京しますが、翌年、東京から迎えに行きます。その時の旅行の日程を時刻表で再現すると、こうなります。

まず東京新橋で、夕方 6 時発の神戸行き汽車（急行）に乗車。神戸には、翌日の午前 11 時 19 分に到着します。神戸では、岡山行きに乗り換え、12 時 40 分発。岡山には夕方 4 時 01 分に着き、ここで津山行きに乗り換え、津山には、その日の夜 7 時に到着します。汽車に乗って、25 時間も揺られたことになります。

しかし、まだまだ、ここからが大変です。津山から米子まで、人力車で、26 里（約 104km）を進まなければなりません。この時、桂月は、日程を短縮するために津山では宿泊せず、夜道を進み、深夜 12 時に勝山までたどり着き、そこで宿泊します。翌日は早朝 5 時に発。最も急坂の四十曲峠では、人力車を 3 人で引いてもらい登り切り、その日の夜に、ようやく米子に到着します。米子で家族と合流したのですが、車中泊を含めると、2 泊 3 日の強行軍でした。

このように、当時、山陰は鉄道が開通しておらず、陸の孤島のような状態で、東京から山陰に行くには、中国山地を人力車で越えなければならず、体力的・時間的・金銭的に、大きな負担がかかりました。このことを踏まえると、「東京よりわざわざ見に行く価値なき」と書いたのも、やむを得なかったのでしょう。（京都―出雲今市間の鉄道全通は、明治 45 年 3 月 1 日です。）

桂月の、龍頭が滝来訪から 120 年以上経ちました。今では、鉄道や飛行機で、山陰を容易に旅行できます。もし、今、桂月が生きていたら、面白い滝だから、ぜひ龍頭が滝に足を運んでみてください、とあの美しい文章で、勧めてくれるかもしれませんね。



清水貞雄 著『汽車の旅：家庭教育』第2編 宝文館 明39.3 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/761922>

（参照 2025-04-09）

明治 30 年代の汽車